

赤塚若樹著
『ミラン・クンデラと小説』
水声社, 2000 年, 459 頁

石 川 達 夫

チェコ出身で世界的な作家となったミラン・クンデラ (1929～) については、既に英語や仏語などでかなりの研究書や博士論文が書かれている。日本語でも、工藤庸子氏の『小説というオブリガート ミラン・クンデラを読む』(東京大学出版会, 1996)、西永良成氏の『ミラン・クンデラの思想』(平凡社, 1998) が出版されている。赤塚若樹氏の新著は、日本語としては 3 冊目の研究書となるが、そのうち最も大部なものである。また、工藤氏と西永氏がもっぱらフランス語を通してのみクンデラを見ているのに対して、赤塚氏がチェコ語とフランス語両方の言語を通してクンデラを見ている点も、前 2 冊と本書との違いである。そして、クンデラにおいてチェコの事象が果たしている役割を明らかにした点が、本書の最大の貢献と言えよう。

本書は 2 段組みで 459 頁もあり、本文と詳細な注のほか、付録として非常に点数の多い参考文献表、クンデラの著作一覧・年譜まで付いていて、申し分のない作りになっている。もっとも、「参照文献」にはありったけの文献が放り込まれており、例えば『エクスプレス・チェコ語』のような語学書(ちなみに著者名が誤記されている)や『羅和辞典』のような辞書まで含まれている。やはりある程度の禁欲と剪定がないと、見苦しい。

赤塚氏はまず第 1, 2 章で、クンデラ文学における鍵概念の一つであるが、なかなか捉えがたい「キitchュ」を明らかにしようとする。第 1 章「キitchュとは何か?」で、「キitchュ」が一般にどのように用いられているかを、様々な辞書や事典、幾つかの論文・エッセイ(とりわけプロッホの)を用いて見てゆく。次に第 2 章「キitchュ批判, あるいは手法としての小説」で、『存在の耐えられない軽さ』を中心にクンデラにとっての「キitchュ」を具体的に見てゆき、存在との無条件の同意から生まれる心的態度がキitchュであり、「クンデラのキitchュ批判の本質は、対象との批判的な距離, アイロニカルな距離を失わないようにするその距離感覚にある」と結論する。これによってキitchュをめぐる議論が尽くされたとは思えないが、赤塚氏は、捉えがたい「キitchュ」概念を明らかにする上でかなり健闘していると言えよう。

次に第 3 章「小説の『ことば』」で、赤塚氏はチェ

コからフランスへの亡命者であるクンデラにおける「翻訳」の問題を明らかにし、バイリンガル作家であるクンデラのチェコ語とフランス語のテキストを比較するという実証的で細かい作業を通じて、クンデラの言語感覚を浮き彫りにする。そして氏は、フランスを舞台にした『不滅』以後の作品が何かを失っていると感じられることについて、「やはりクンデラの文学に輝きを与えているものは、チェコの歴史とそこで生きた経験的現実, あるいはもしこういってよければ、チェコの歴史的現実がもたらす具体性なのではないだろうか」と、説得力のある指摘を行っている。

第 4 章「クンデラとチェコの批評」では、クンデラに批判的なミラン・ユングマンの「クンデラのパラドクス」を中心として、クンデラがチェコの批評にどのように受け止められてきたかを見ている。この章は従来光を当てられていなかったテーマを扱っているだけに貴重な部分であるが、クヴィエトスラフ・フヴァチークの『ミラン・クンデラの小説世界』のような重要なクンデラ論を正面から取り上げていないのは腑に落ちない。

第 5 章「歴史をとらえなおす小説のかたち」では、クンデラをポストモダニズム作家に分類した上で、主として、特にボヘミアの歴史を捉え直そうとする試みとして書かれているという『笑いと忘却の書』の形式を分析している。現代小説に関する赤塚氏の博識には感心させられるが、クンデラをポストモダニズムの作家とすることに関しては、クンデラを古典的モダニズムに分類しているフヴァチークを筆頭として、大いに異論のあるところであろう。赤塚氏のようにポストモダニズムをもっぱら形式的な現象として理解してよいものであろうか? 少なくともクンデラ自身の小説観からすれば、クンデラはヨーロッパ近代の精神の正統な継承者であるはずである。

概して本書は資料紹介の性格が強く、資料的な価値は高いが、クンデラの個々の作品の読みと解釈という点では物足りない。著者自身の読みと解釈をもっと示してほしかった。

最後に、少なからぬ誤植があることは残念である。特に気になったのは、赤塚氏自身が「クンデラ理解に不可欠のキーコンセプト」と呼ぶ「存在との同意」の原語を挙げている個所(97 頁)で格変化の誤った形が挙げられているところである。同じ誤植が再度(104 頁)出ているとなると、著者のチェコ語能力を疑われても仕方がない。このようなことは是非避けて欲しいものである。

(いしかわ たつお・神戸大学)